



Title	大阪の水壺
Author(s)	中西, 秀樹
Citation	makoto. 1980, 31, p. 7-7
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86102
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大阪の水壺

泉大津保健所

中西秀樹

大阪は、別名食い倒れという。

食べる物がおいしいからである。なにも、高級料亭レストランの多いことは関係がない。

ごくあたりまえの、一せんめし屋や家で食べるおかずが、おいしいということである。このおいしいさの中に、うす味だ。ということがある。大阪は、水の質が良かったので、煮炊きしても材料の持ち味を損ねなかったからだ。という人がいる。そうであらう。幼い頃、大阪は水の都だ。と教えられたものである。

しかし、これは良い水が湧き出す町という意味ではない。運河が四通八達していたからである。その名の元となった橋や川の大方は、今は無い。橋も、水の代りに自動車の流れを下に見る時代になったのである。

大阪の町は、よく知られるように、淀川や大和川によって上流から運ばれた土砂が難波の津に埋ってできた中州の上の町である。だから井戸を掘ってもい

い水は出ない。たまによい水が出ると、それだけで有名になったのである。道頓堀の二ツ井戸、大阪城の金明水、銀明水、地名では清水谷という名が残っている。こんなことから、大阪の庶民の大方は、川の水を飲用に使っていたのである。井戸の水質のよくないのを補って余りあるほど、川の水は良かったのである。もちろん、川の清浄な水を直に使える家は限られているから、水を汲んできて町中で売り歩く水屋という商売があった。明治二〇年頃で、一荷につき一錢五厘程度だったそうである。上方落語に壺算という噺がある。それぐらい、水屋から購めた水を入れておくための水壺が身近なものだったのである。汙過法の発達していない当時では、井戸から汲み上げただけでは、どうしても混りがちな砂などを沈めるためにも、水壺は必要だったろう。

水道が普及しない所で、外国

との接触があれば、伝染病が流行するのは当然である。幕末期の日本でのコレラ流行は、文政五年（一八二二）以後数回あるが、もともとも有名なものは、第二回目にあたる安政五年（一八五八）の流行である。これは、長崎に入港した米国の軍艦ミシシッピ号によって中国からもたらされたもので、日本各地に広まった。死者は、二十八万人に達したといわれている。この時、長崎医学伝習所のオランダ人医官であつたボンベは長崎奉行を動かし、魚介類野菜類の食品衛生を指示するとともに、チューダーリッヒの処方にもとづくコレラ治療を実施したのである。コレラ菌がコッホによって発見されたのは、明治一六年（一八八三）であり、コレラの病原菌の知られていない当時としては、治療法も硫酸キニーネや阿片を与え温浴を施すなど、対症療法しかなかった。しかし、こ

れは我が国における最初の本格的なヨーロッパ医学にもとづく衛生行政というべきものである。この時のコレラは、大阪でも大流行した。コレラについて、当時の日本では、緒方洪庵の訳出した扶氏経験遺訓の第二巻のコレラの章ほどしか知られておらなかった。洪庵は松本良順によるボンベの口授にモスト、コンラジ、カンスタットの医書に自分の意見を加えたものを、百部絶版不許売買の虎狼痢治準として刊行したのである。このような努力が実ったのか、翌安政六年に大阪に再びコレラが流行したが、幸いにも大きくならなかった。維新以後も大阪は、明治一〇年、一二年と相次いでコレラ禍にみまわれた。同一九年八月大阪府は、コレラ汚染の恐れのある地点を水汲場に指定したのである。源八橋（現在の環状線桜宮駅南西）付近、網島（京阪線天満橋駅東側の私学会館、藤田美術館のあるあたり）であつた。さらに翌年二月には、嬉ヶ崎（阪神線千鳥橋駅東側）を追加した。また、水汲場に汚過所をもつけた。こうした対策にもかかわらず、コレラを始めとする伝染病の流行を食い止めることができなかった。これよ

り前、明治一九年大阪府は、英人技師パーマーを招いて上水道建設の調査計画を行なわせていたが、前年一八年の洪水により財政が困難であり建設を断念せざるを得なかった。一三年にはまたも長崎よりコレラが侵入し、大流行の兆を見せていたので、大阪市会は、上水道建設を議決し、一八年十月には第一期工事を完成させた。この時の工事費は二四〇万円、市の予算が八〇万円の頃のことである。これを境に、水屋も水壺も大阪の庶民からしだいに忘れられていった。伝染病の恐怖から、大阪の解放される時となったのである。

参考図書

長崎医学百年史 長崎大学
明治大正大阪市史

